民主主義システムと戦争推進体制

まえがき

12 月 14 日、赤穂浪士討ち入りを思い起こさせる日に、安倍政権は辺野古の海面に土砂投入の開始を指示した。同政権は、韓国や中国との対立をあおる言動を繰り返し、国民の間にもヘイト・スピーチがしだいに増えてきた。どの国も過去の戦争を説明するさい、開戦理由の説明に、「戦争を始めたのは相手国がわが国の安全保障環境を脅かした結果、やむを得ずわが国が立ち上がった」という受け身の論理で語ろうとする。しかし、実態は開戦国の朝野に戦争をしたいという気分が盛り上がって開戦に至ったに過ぎない。

今日の沖縄問題は、米軍の基地駐留を日本政府が積極的に引き留めていることが、主因である。その背景に、日本の市民の間に「戦争をしたい」という気分が強くなっていることがあると思われる。

日本では憲法第 9 条があって、いく分歯止めがあるが、アメリカではむしろ軍事的な潜在力あるいは顕在力を常時世界中に誇示することが前提になっており、そのことが強固な軍産複合体をさらに肥大化させている。そして、安倍政権は日本をアメリカに追随する同種の軍産複合体国家に育成しようとしている。

1945 年に広島と長崎で原爆が実戦で使用されてから以降、人類はみずから種の絶滅をもたらしうる大規模な破壊兵器を手に入れて、それまでの歴史と 1 線を画すことになった[1]。2017 年のノーベル平和賞に、核兵器廃絶運動を行ってきた核兵器廃絶国際キャンペーン「ICAN」が受賞したのも、その事実についての認識が広まったことを示す 1 里塚と言えよう。しかし、近代の戦史を見ると、人間社会が仮想敵国をイメージの中に作り出し、数十年の世代交代を経ると必ず前世代の失敗を繰り返している。先にアメリカの軍事志向についてのチョムスキーの論説を紹介した[2]。アメリカに限らず、民主主義社会の国民を統合し管理するシステムは、依然として戦争体制を強化する方向に向いている。

1．第一次世界大戦におけるドイツ人たちの自意識

第一次世界大戦を開戦した新興国ドイツがどうであったかを見てみよう。カイザー・ヴィルヘルム 2 世は、軍国主義を推進し国威発揚を目指した。ベルリンを大改造し、王宮前の広場で毎朝早く軍隊の大規模な行進を行わせ、閲兵するのが日課であった。それを見物

---

[1] そのことについてもっとも根本的な主張しているのは、ギュンター・アンダース『核の脅威』『時代おくれの人間』、ハンス・ヨナス『責任という原理』

[2] 「『華氏 119』と『誰が世界を支配しているのか？』」『筒井新聞』第 348 号（1）
http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/348/348-1.pdf

に大勢の市民が広場周辺にやって来て胸躍らせたという。たまたま当時の映像をテレビで見る機会があったが、後のナチスの軍事パレードにそっくりで、「ナチスが最初じゃなかったんだ」と思った。

1914 年 8 月、必ずしもドイツがフランスに対して戦端を開く必然性があるとは思えない理由で、ドイツ軍は中立国ベルギーの国境を越えてベルギーの町々を蹂躙し、フランス北部へ攻め入った。ベルギーは国王自身が総司令官になって総力で抵抗した。しかし、ドイツ軍は圧倒的な兵力をもってリエージュやルーヴァンを破壊し、市民の抵抗を機に非武装の市民を見せしめに大量虐殺した。とりわけ古都ルーヴァンの世界に二つとない文物を保有していた図書館を焼き払ったことに、世界の人びとはショックを受けた。それに対して、ドイツを代表する文化人たちはドイツ国家至上主義を臆面もなく公言した。以下に、バーバラ・タックマンの『八月の砲声』から、そのいくつかを紹介する[3]。

> トーマス・マンは言った。戦争は、「浄化作用であり、解放であり、宏大な希望そのものである。ドイツの勝利は物財に対する精神の勝利となるのだ。ドイツ精神は平和主義者の文明の理想に反抗する。平和は文明腐敗の要素ではなかろうか？」(中略)トーマス・マンは、…ドイツ人は、世界の国々の中でももっとも教育程度が高く、法を重んじ、平和を愛する国民であるから、最高の権力を握り、勢いをふるい、「どの点から見てもそう呼称するのが妥当なドイツ戦争を通じ、”ドイツ的平和”」を確立するにふさわしい国民だというのだ。
>
> ドイツの科学者がアメリカのジャーナリスト、アーウィン・コブに語った。「我々ドイツ人は最高に勤勉で、熱心で、ヨーロッパ中で一番教育の高い民族である。ロシアは反動の典型であり、イギリスは利己主義と背信の、フランスは頽廃の、そしてドイツは進歩の典型である。ドイツ文化は世界を啓蒙し、この戦争が終わった暁には、それ以外の文化はみな消滅してしまうだろう」。

ドイツ軍が占領した町々で市民の抵抗があったが、それを「テロ行為」と称して家々を焼き、住民を大量虐殺することを行く先々で続けた。アルデンヌ、タミーユ、ナミュール、ヴィゼ、アイスデン、ディナンなどである。そして、ドイツ人はその「テロ行為」に対してベルギー人を非難した[4]。このことは、現在アメリカの正規軍がイスラム諸国を傍若無人に空爆し、市民たちを無差別に殺戮しながら、相手を「テロリスト」と呼んでいるのと同じである。

２．第二次世界大戦における日本人たちの意識

---

[3] バーバラ・タックマン、山室まりや訳『八月の砲声』下、ちくま学芸文庫、2004 年,pp.164-167

[4] バーバラ・タックマン、前掲書、pp.170-176

第 2 次世界大戦中に日本軍が中国、インドシナ、フィリピン、インドネシア、タイ、ビルマなどを占領したときには、「八紘一宇」の盟主となり、日本が近隣諸国を指導してやるのだという思い上がりがあった。その点、1914 年のドイツとずいぶん似ている。そして、占領地の一般人虐殺事件や捕虜虐待などもさして罪の意識なしに行った点も似ている[5]。

今日、「南京大虐殺はなかった」「慰安婦問題は民間業者の問題であって、日本軍に責任はない」といっているのは、第 2 次大戦後ドイツ人が反省を表明し続けているのと対照的である。そして、最近ヘイト・スピーチが目立つようになったことは憂慮すべき事態である。100 年前のドイツとほとんど同じことを政権与党が言っていることに危機感を覚える。

3．第二次世界大戦後のアメリカ人の意識

前号でご紹介したチョムスキーの『世界は誰が支配しているか？』は、アメリカが世界を支配しているという意識を臆面もなく主張していることに鋭い批判を浴びせている。そして、アメリカはソ連の国境近く、ドイツにもトルコにもミサイルをずらりと並べているのに、ソ連が 1962 年にキューバにミサイル配備をしようとしたら大騒ぎしたことは、思い上がりも甚だしい、と指摘している[6]。

ケネディ大統領も、ソ連の行動は軍事的な脅威ではなくて、むしろ心理的、政治的なものだと考えていた、という。ケネディは 1 カ月前に共和党への対抗心から声明を出し、「もしソ連がキューバで『甚大な攻撃力』を蓄えるにいたればゆゆしい問題が発生するであろう」と警告した。「先月のあのとき、アメリカはそんなことは気にかけないと言っておけばよかった」とケネディは後悔した[7]。つまり、戦争の瀬戸際に事態を運ぶか否かは、当事者の選択によっていずれにもなり得たということである。

4．戦争は人間の本能か？

ロジェ・カイヨワというフランスの社会学者が 1963 年に書いた『戦争論』は、人類の歴史とともに時を重ねてきた戦争という現象を包括的に論じている[8]。

民主主義社会が世界の大勢になってからは、総力戦が当たり前になり、産業・学問・組織力といった社会の総力をあげて、力尽きるまで破壊を徹底させることになる。大国同士の戦いは対称であり、一方が攻勢に出た場合に他方がほどほどに身を引くという選択肢

---

[5] これらは、本多勝一の多数のルポルタージュなどに詳しい。

[6] 前掲『筒井新聞』第 348 号（1）

[7] マイケル・ドブズ、布施由紀子訳『核時計零時 1 分前』NHK 出版、2010 年,pp.43-44

[8] 松枝茂夫訳『戦争論、法政大学出版会、1974 年

がなくなる。

人間に、戦いを避ける知恵があるかどうかという問題について、著者は分からないと言っている。戦争は祭りとともに、周期的に社会を襲う「痙攣である」というのが彼の診断である[9]。今日、地球上の人類を何回も絶滅させるに十分な核兵器が蓄積され、それを「抑止力」といっている（原発が経済的に成り立たない、産業システムとしてはナンセンスなものだと証明された今日、「核抑止力による安全保障のために原発を維持しなければならない」という発言がしばしば政権与党の政治家から聞かれる）。

ここまでくると、「捨身飼虎」のような宗教的愛他主義にまで社会が合意しなければ平和は来ないのではないだろうか。憲法第 9 条は、一国の市民にそこまで合意することを要求している。

（2019 年 1 月 05 日　　哲）

[9] ロジェ・カイヨワ、前掲書、p.238